



TITLE:

ことばの発達：健常な子と障害のある子(認知・行動の基底としての力学と論理,研究会報告)

AUTHOR(S):

正高, 信男

CITATION:

正高, 信男. ことばの発達：健常な子と障害のある子(認知・行動の基底としての力学と論理,研究会報告). 物性研究 1998, 71(2): 185-185

ISSUE DATE:

1998-11-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/96436>

RIGHT:

ことばの発達—健常な子と障害のある子

正高信男

(京都大学)

音声言語をまだひとことも話さない0歳児にとって、ことばの基本的特徴である(1)複数の音節からなる音の発声、(2)各音節が子音の要素をもっている音の発声は、わたしたち大人には想像もつかないほど、困難な技術の習得であるらしい。少なくともモデルである音を耳で聞いて、それを発声器官でまねるだけでは、不可能であることがわかってきた。どこが難しいかというと、息をずっと吐きつづけながら声門をリズムカルに開閉する技術の習得にたいへん困難がともなう。そこで0歳児はどのように、この課題を解決していくかという、ロコモーションをおこなうために手足のリズムカルな運動を支配している発振子の情報を借用することがあきらかとなった。生後7—8ヵ月になると、まだ立って歩けないまでも、手足を子どもがバタバタさせる。その動きと発声を同期させることで、すばやくリズムカルに声を出すようになる。しかも先天的に耳の聞こえない子どもを、生後6ヵ月以前からずっと調べていくと、この段階で音声言語獲得の道が決定的に絶たれることもわかってきた。自分の声が知覚できないため、手足の運動による自己受容感覚とマッチングさせることができない。けれども、じゃあそれで耳が聞こえないと、言語習得の道がすべて閉ざされたかという、音声言語が作り出せないとわかった途端、他の方法を模索し始める。手による表出、つまりサイン言語の萌芽である。生後8ヵ月ごろになると、ほとんど声を出さなくなる。それと時期を一にして、手を用いてサインを表現し始める。こうしてみると、言語の能力が外化する道は、単一でないことがわかる。さらに、ウィリアムス症候群という特異的な遺伝性疾患をもった子どもの言語習得はわれわれに、興味深い知見を提供してくれる。この病気は第7染色体上の微細な遺伝情報の欠落によって、もたらされるが、まず手足の運動機能の発達遅滞がみられる。ふつう2歳半歳ぐらいになって、はじめて歩けるようになる。すると言語機能には障害がないにもかかわらず、やはり歩き出すころまで、言語は出現しない。ところが、それにもかかわらず3歳ごろから、ことばを話し始めるようになると、猛烈な速度でそれまでの遅れをとりかえして、健常児とかわらぬように話せるようになる。聴覚感受性が極端にたかく、それが遅れを代償して言語獲得を可能にしていると考えられている。われわれには、障害が生じて、それを補う身体の可塑性が付与されていることが、示唆されている。